

連載

# 私の臨床検査史

## わが国における精度管理の歩み

河合 忠

Tadashi KAWAI, MD

国際臨床病理 (ICP) センター所長・自治医科大学名誉教授

前号 Vol.3 No.2 より続き

### ISQC の足跡 (2)

#### ● 第 6 回 ISQC-Geneva で日本の活動を紹介

1974年6月に第1回 ISQC-Tokyo が成功裡に終わったのを機会に、筆者が第6回 ISQC-Geneva, April 23-25, 1975 に出席し、日本並びにアジア地区における精度管理の実状について報告させていただいた。この席上で、主としてヨーロッパ圏の多くの精度管理分野の専門家と知己を得、その後も交流させていただいた。

会議はジュネーブの展示会場 (Palais des Expositions) コンサートホール (写真1) で、3日間にわたって開催された。筆者の発表内容は、Quality Control in Clinical Chemistry, Transactions of the Vth ISQC, Walter de Gruyter, 1975 に掲載されている。既に、日本医師会が実施していた精度管理調査には1974年度、607施設が参加しており、わが国でも外部精度管理調査について実績を積み重ねつつあったが、ヨーロッパの臨床検査界には全く知られていなかった。こうした交流を通して、ますます ISQC-Tokyo の会議録を英文で刊行し、全世界に配布することの重要性を再認識することとなった。

第6回 ISQC-Geneva の終了した翌日、ベルギー国の古都ブルージュで行われた「交差免疫電気泳動法に関するワークショップ」、引き続き「Colloquium on Protides of Biological Fluids」に出席、研究発表を終えて帰国した。

#### ● ISQC-USA で日本の活動を紹介

Dade社の地元、米国では、精度管理調査については、College of American Pathologists (CAP) がさまざまな形で実績を積んでおり、Dade社がスポンサーとなった ISQC の開催は漸く1976年になって実現した。学術組織委員長を務めたのは、当時、ニューヨーク州シラキューズにあった State University of New York, Upstate Medical College の臨床病理部長をされていた John Bernard Henry 博士であり、既に「Clinical Diagnosis by Laboratory Methods」の名著を編集された著名な臨床病理医であった。米国での第1回 ISQC は、Inter American Symposium on Quality Control と命名され、Dade社の地元であるフロリダ州デイド郡のキー



写真1. ISQC-Geneva の会場となったスイス国、ジュネーブの展示会場

ビスケインで開催された。プログラム構成も、ISQC-GenevaやISQC-Tokyoとはやや異なり、精度管理についての発表はプログラムのごく一部を占めるに過ぎず、筆者は「日本とアジア地域における精度管理の現状」について講演した。Henry博士自身の基調講演は、「Introduction to Organ Panels」と題し、他の多くの発表についても臨床検査の利用についての内容であった。その会議録は、翌1977年に、Masson Publishing USA, Inc., NYからJ.B. Henry and J.L. Giegel編著「Quality Control in Laboratory Medicine」として刊行されている。1976年という、筆者が臨床病理学のレジデント教育を終え、米国専門医資格を取得してフロリダ州マイアミ市を離れてから既に14年を経過しており、精度管理についての技術的問題についての研究は下火となり、むしろ日常業務の一部として定着していたことを考えると、ISQC-USAのプログラム編成については十分に理解できた。その後、ISQC-USAは定着することなく、1980年代に入ると、新しい止血血栓分野における臨床検査で事業拡大を推進していたAmerican Scientific Products社の

American Dadeが主催する「Hemostasis Conference」へと移行した。

筆者は、1976年6月7日に懐かしいマイアミ空港に到着した。多くの友人のいるマイアミに久しぶりの訪問であったが、日程の関係により、短い時間であったが留学中に大変お世話になった立石ルイズ夫人とマイアミ大学のJ.B. Miale教授（臨床病理学部門主任）ならびに彼の血液凝固学研究室スタッフとの再会を楽しみ、6月11日に帰国した。

● 第12回WASP国際会議に合わせた第5回ISQC-Tokyoの開催

日本で開催されたISQCの開催期日と会場は表1に、また主な役員の一覧表を表2にまとめた。第1～3回までは東京で開催されたが、第4回を初めて関西で開催し、それ以後は東京と関西とで交互に開催された。ISQCのロゴは事務局の発案によるもので、第4回ISQC-Osakaから使用されたと記憶している（写真2）。第5回は特別の企画として、第12回世界病理・臨床病理学会議と同時期に東京で開催された。

表1．日本で開催されたISQCの会期と会場

回数	会期	会場
第1回ISQC-Tokyo	1974年 6月 1～2日	東京プリンスホテル（東京）
第2回ISQC-Tokyo	1976年 6月 5～6日	京王プラザホテル（東京）
第3回ISQC-Tokyo	1978年 6月 3～4日	京王プラザホテル（東京）
第4回ISQC-Osaka	1981年 6月 6～7日	神戸国際会議場（神戸）
第5回ISQC-Tokyo	1983年10月15～16日	京王プラザホテル（東京）
第6回ISQC-Osaka	1987年 6月13～14日	国立京都国際会館（京都）
第7回ISQC-Tokyo	1991年 6月15～16日	京王プラザホテル（東京）
第8回ISQC-Osaka	1995年 6月17～18日	神戸国際会議場（神戸）
第9回ISQC and Management	2001年11月 3～4日	千里ライフサイエンスセンター（大阪）

表2．日本で開催されたISQCの主な役員

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
会長	小酒井望（順大）	小酒井望（順大）	小酒井望（順大）	富田 仁（京大）	小酒井望（順大）
副会長	-	-	富田 仁	山中 學（東大）	富田 仁
学術組織委員長	河合 忠（日大）	河合 忠（自治医大）	山中 學	奥田 清	河合 忠
プログラム委員長	佐々木禎一（札幌大）	佐々木禎一	佐々木禎一	佐々木禎一	山中 學
総務委員長（IRC）	E.J. Martica	E.J. Martica	E.J. Martica	JE. Bishop	BM. Strawn
編集委員長	生垣 賢（IRC）	生垣 賢	生垣 賢	生垣 賢	生垣 賢
事務局（IRC）		尾川政也	尾川政也	武本要人	小畑勝利

  

	第6回	第7回	第8回	第9回
会長	奥田 清（大阪市大）	河合 忠（自治医大）	大場康寛（近大）	菅野剛史（浜松医大）
副会長	林 康之（順大）	大場康寛	菅野剛史	岡部紘明（熊大）
学術組織委員長	大場康寛	菅野剛史	岡部紘明（熊大）	巽 典之（大阪市大）
プログラム委員長	菅野剛史	岡部紘明	上田國寛	戸谷誠之（昭和女子大）
総務委員長（IRC）	中本浩行	中本浩行	中本浩行	小林 博
編集委員長	宮井 潔（阪大）	上田國寛	中原一彦	一山 智（京大）
事務局（IRC）	山本昌利	山本昌利	山本昌利	山本昌利

すなわち、1983年10月10日から14日までの5日間、京王プラザホテルにおいてWorld Association of Societies of Pathology [Anatomic and Clinical] (WASP) が主催するXII World Congress of Pathology (Anatomic and Clinical) は、日本臨床病理学会（現・日本臨床検査医学会）がホスト役で開催された。この国際会議は、アジアで初めて開催されたもので、会長には小酒井望博士、副会長には石川栄生博士（日本病理学会代表、東京慈恵会医科大学教授）、事務局長には筆者が指名された。この会議には、多くの国から専門家が出席することから、精度管理に関する講演をすべてISQCにまとめ、第12回世界会議のポストコンGRESS・シンポジウムとすることでWASP役員会の了承を得られたのである。したがって、ISQCの役員構成も第12回世界会議と合わせる形となり、小酒井望会長、富田 仁副会長、河合 忠学術組織委員長、山中 學プログラム委員長らが就任された。世界各国からの多彩な演者と参加者が加わった、文字通り、世界的な規模での初めての「精度管理に関する国際シンポジウム」となった。後援団体も、日本臨床病理学会、日本臨床化学会、世界病理・臨床病理学会連合(WASP)、米国臨床検査標準委員会(NCCLS)、そして国際試薬株式会社名を連ねた。

1980年代に入って、医療費の増加が問題になり始め、先進各国で医療費の抑制政策が導入されることになり、日本がホスト役でWASP世界会議が開催された1983年頃は臨床検査界にとっては、いろいろな意味でピークを迎えており、世界会議と第5回ISQC-Tokyoの合同開催は成功裡に終わり、20年を経過した今でも当時の海外からの参加者から思い出話として語り草となっている。また、翌年に刊行された立派な会議録もWASPの組織を通して全世界に配布され、改めてわが国の精度管理の実状を世界に発信するのに大いに役立ったと信じている。

### ● 終焉を迎えたISQC

第5回ISQC-Tokyoをピークとして、先進各国の医療経済は確実に下降線を辿り、臨床検査界も例外ではなかった。そのうえ、臨床検査の技術的向上を主として目指した精度管理自体も新しい展望を迎えつつあった。従来の精度管理（Quality Control, QC）から、臨床検査成績の施設間差を是正し、信頼性を継続的に維持するための精度保証（Quality Assurance, QA）へと活動が拡がりつつあった。また、1970年代に始まった本格的なコンピュータ時代を迎えて臨床検査情報システム（Laboratory Information System,



写真2．第4回ISQC-Osakaでの開会式で祝辞を述べる筆者  
スクリーンには、ISQCのロゴマークが投影されている。



**写真3 . 最後となった第9回ISQC-Osakaの会場にて**

左から、家次 恒代表取締役社長（シスメックス（株））、菅野剛史第9回ISQC-Osaka会長（浜松医科大学副学長）、筆者（第7回ISQC-Tokyo会長）、大場康寛第8回ISQC-Osaka会長（近畿大学名誉教授）、山本昌利ISQC事務局担当（IRC）と並ぶ。

LIS)が普及し、工業界に浸透しつつあったTQC活動との関連もあり、ISQCのあり方について、毎回議論が活発に行われ、時代に合わせてプログラムに工夫がなされた。既に、ISQC-Genevaは1970年代でその役目を終え、米国でのISQCは継続されずに他の専門的な会議へと脱皮していった。そうした背景の下で、わが国の臨床検査専門家の熱心な働きかけとIRCの中本浩行社長の絶大な理解があって、1983年、第5回ISQC-Tokyo以降は4年毎の開催で継続された。第8回ISQC会議では、ISQCの名称変更の可能性も含めて活発な議論が交わされたが、大場康寛会長をはじめ役員一同の決断で「伝統ある名称」を残し、別に「Toward A New QC-QA-QM Paradigm」なる副題を付け加えることで、改革の意図を示された。

ISQCにとって最大の危機は、別の形で襲ってきた。IRCの最大の株主企業である株式会社ミドリ十字の挫折である。1970年につぼみを出し、1974年に開花し、今日まで30年余にわたって臨床検査界に限りな

い実りを与えてきたISQCを初めから育み、見守ってきた筆者にとっては、最早ISQCの継続を希望することは許されなかった。しかし、新しく就任された小林 博社長の身を切るような決断によって、最後のISQCは甦った。そして、2001年11月3～4日、大阪の千里ライフサイエンスセンターで、ISQCの略称は残すものの、正式名称をInternational Symposium on Quality Control and Managementと改め、会議のスローガンを「Global Standardization and Advanced Quality Management '01」とした。菅野剛史会長、岡部紘明副会長、巽 典之学術組織委員長、そして戸谷誠之プログラム委員長ら役員一同（写真3）の斬新なアイデアの基に、ISQCの30年の歴史を閉じるに相応しい、21世紀の臨床検査を展望する会議となった。

編注)文中の所属は当時のものを記載しております。何とぞご了承ください。